

立ち止まって考えよ

ヨブ記 37 章 1-24 節

はじめに

月の第四週に私が説教をさせていただく時には、旧約聖書の「ヨブ記」からお話することになっています。今日は 37 章から学びたいと思いますが、「ヨブ記」は 32-37 章にエリフという人の言葉が書かれています。最初に、「ヨブ記」のこれまでの流れを少し振り返ってみましょう。

1. ヨブの試練と信仰

ヨブは、誠実な心を持っていて、神様を愛し悪から遠ざかっている人でした。神様は、そんなヨブを祝福して、多くの財産と多くの子どもを与えられました。

しかしそんなヨブに、サタンが目を留めて、神様にこう言うのです。「ヨブは、あなたに祝福されて、多くの財産と多くの子どもに恵まれているから、あなたを愛しているに過ぎません。もし財産と子どもを失えば、きっとあなたへの信仰を捨てるに違いありません」。

そこで神様はサタンに、ヨブの財産と子どもを奪うことを許可しました。するとヨブは、犯罪や自然災害に巻き込まれて、一日のうちにすべての財産と子どもを失ってしまうのです。

しかしヨブは、そのような試練の中でも、決して神様への信仰を捨てませんでした。彼は、神様を礼拝してこう言うのです。「**私は裸で母の胎から出て来た。また裸でかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな**」(ヨブ記 1:21)。

するとサタンはもう一度、神様にこう言うのです。「ヨブは、財産と子どもを奪われても、健康に恵まれているから、あなたを愛しているのです。もし健康を失えば、きっとあなたへの信仰を捨てるに違いありません」。

そこで神様はサタンに、ヨブの健康を奪うことを許可しました。するとヨブは、足の裏から頭の先まで、悪性の腫物で侵されるのです。夜眠れないほどの痛みがあり、やせ細っていきます。内臓も侵され、それが原因で体から悪臭が出るようになりました。そのため、人々からも避けられ、ゴミのように扱われます。そして妻からも、「**神を呪って死になさい**」(ヨブ記 2:9)と見捨てられます。

しかしヨブは、そのような試練が続く中でも、決して神様への信仰を捨てませんでした。彼は、妻に向かってこう言うのです。「**あなたは、どこかの愚かな女が言うようなことを言っている。私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわざいをも受けるべきではないか**」(ヨブ記 2:10)。

ヨブは、財産を失い、子どもを失い、健康も失い、妻からも見捨てられてもなお、神様へ

の信仰を捨てなかったのです。これがヨブの信仰です。

2. 三人の友人たちによる「因果応報」による災いの解釈

ヨブには、三人の友人がいました。エリファズ、ビルダデ、ツォファルの三人です。彼らは、ヨブが災いの中で苦しんでいると聞いて、ヨブを慰めるために駆けつけて来ました。彼らは最初、ただヨブのために涙を流し、一週間、一言も語らずに、ヨブのそばに寄り添い続けたのです。

しかし三人の友人たちは、ヨブと会話を交わし始めると、次第に態度が変わっていきます。ヨブ記は全部で 42 章ありますが、3-31 章までがヨブと三人の友人たちとの討論の内容が書かれています。その討論のテーマは、ヨブの災いの原因は何かというものです。

三人の友人たちは、ヨブの災いの原因を「因果応報」の原理で解釈して、ヨブを教え導こうとします。「因果応報」とは、人は必ず自分の行いによって報いを受けるというものです。三人の友人たちは、ヨブの災いの原因は、ヨブの罪にあると考えます。ヨブが何か大きな罪を犯しているから、このような大きな災いに遭っているのだと考えたのです。だからもし、ヨブが自分の罪を認めて神様に悔い改めるなら、災いは終わり、神様の祝福を取り戻せるはずだとヨブを教え導こうとするのです。

3. ヨブの問題点

しかしヨブは、三人の友人たちの考えに納得できないのです。ヨブは神様に愛され、自分も神様を愛し、そして隣人をも愛してきたのです。ヨブには、このような大きな災いを受けなければならないほどの大きな罪があるとは、どうしても思えなかったのです。もちろんヨブには全く罪がなく、完璧な人間だったわけではありません。ヨブも私たちと同じ人間ですから、確かに罪がありました。しかしヨブは、自分の罪を神様に隠すことなく、神様の前に告白し、赦しを求めたのです。そして贖い主に頼り、いけにえも献げて、罪の贖いをしてきたのです。神様からも、「**彼のように、誠実で直ぐな心を持ち、神を恐れて悪から遠ざかっている者は、地上には一人もいない**」(ヨブ記 1:8)と言われるほど、ヨブと神様との関係には問題はなかったのです。

それなのに突然、神様との親しい交わりを失い、祝福された人生を失い、大きな苦しみに襲われ、孤独と絶望のどん底に突き落とされたのです。ヨブは、神様とサタンとのやり取りを知りません。ですから、神様がなぜ自分をこんな目に遭わせるのか、なぜ神様が沈黙を守っているのか、なぜ助けてくださらないのかが分からないのです。

ヨブは、神様の沈黙があまりにも長く続くので、次第に神様に対して不信感を持つようになっていくのです。自分は誠実に歩んでいるのに、神様が私に誠実に関わってくださらない、そうしてヨブは、神様がおかしい、神様が間違っていると考えようになり、ついには、神様よりも自分のほうが正しいと考えるようになっていったのです。

そのような中で、ヨブの前に「エリフ」という人が現れます。エリフは、ヨブと三人の友

人たちとの討論をずっと聞いていました。しかしずっと聞いている中で、エリフは段々と怒りを覚えてきたのです。それは、ヨブが神様よりも自分のほうが正しいと考えるようになっていったからです。そうしてエリフは、32-27章まで、ヨブと三人の友人たちに向かって言葉を語り始めるのです。

4. 今、光は見ることができないが…

ではエリフは、37章で何を語るのでしょうか。エリフの言葉も、この37章で終わりとなります。エリフの言葉が終わると、38章からはついに神様が長い沈黙を破って、ヨブに語り始めるのです。

36章の後半から、エリフは神様が自然を支配する方であることを語ります。特に、「**稲妻**」や「**雷鳴**」について語り、空に響くあのゴロゴロ、ドカーンという恐ろしい「雷鳴」は、神様の「御声」だとエリフは言うのです。2節を見てみましょう。「**よく聞け。その御声の荒れ狂うのを。その御口から出るとどろきを**」。エリフは、あの恐ろしい「雷鳴」は、神様の「御声」なのだから、「よく聞け」とヨブに言うのです。また神様は、雲から「稲妻」を放ち、「稲妻」は神様の指図と命令によって、世界の隅々まで放たれると言うのです。「稲妻」や「雷鳴」は、おもに夏の季節に見られる神様のみわざです。

6-10節には、冬の季節に見られる神様のみわざについて、エリフは語ります。「**雪**」も「**夕立**」の「**激しい雨**」も神様の命令によって起こり、「**つむじ風**」も「**寒さ**」も「**氷**」も神様によるものだとエリフは言うのです。

そして、このように恐ろしい自然の脅威によって、7節にあるように、「**神はすべての人の手を封じ込められる**」とあります。恐ろしい自然の脅威によって、私たち人間は何もできなくなり、家の中に閉じこもる他なくなります。神様はなぜ人の手を封じ込められるのか、それは、同じ7節にあるように「**神の造った人間が知るため**」です。つまり、私たち人間が、それらを通して、何かを知るためなのです。

14節でエリフは、「**ヨブよ、これに耳を傾けよ。神の奇しいみわざを、立ち止まって考えよ**」と言います。私たち人間の手が封じられて、何もできない時、神様の御業を、立ち止まってよく考えよと言うのです。神様が私たち人間の手を封じられる時は、神様の御業をゆっくりよく考えるべき時なのです。

13節でエリフは、「**神は、懲らしめのため、ご自分の地のため、または恵みのために、これが起こるようにされる**」と言います。神様のあの恐ろしい自然の脅威も、目的があるのだと言うのです。そして、その目的は、「懲らしめのため」であり、「ご自分の地のため」であり、「恵みのため」であると言うのです。

ここでの「懲らしめ」とは、直訳では「むち」という言葉です。新約聖書のヘブル12:5-6には、こういう言葉があります。「**わが子よ、主の訓練を軽んじてはならない。主に叱られて気落ちしてはならない。主はその愛する者を訓練し、受け入れるすべの子に、むちを加えられるのだから**」。「懲らしめ」とは、父親が愛する子どもを訓練し、しつけるために加える「むち」

のことです。神様は、私たちをしばしば訓練し、成長させるために「懲らしめ」「むち」を加えられる時があるのです。同じヘブル 12：10-11 には、こうあります。「**霊の父は私たちの益のために、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして訓練されるのです。すべての訓練は、そのときは喜ばしいものではなく、かえって苦しく思われるものですが、後になると、これによって鍛えられた人々に、義という平安の実を結ばせます**」。神様からの訓練、「懲らしめ」「むち」は、確かに厳しく辛いものですが、それは結局、私たちの益のため、私たちを成長させ、平安を与えるためのものなのです。

神様のあの恐ろしい自然の脅威でさえ、神様の愛から出ていて、私たちの益のため、私たちに平安を与えるためのものとエリフは言うのです。そうであるならば、ヨブが経験している苦しみや災いも、きっと神様の愛から出ていて、ヨブを訓練し、成長させるためのものと言おうとしているのだと思います。そのことを、苦しみのただ中で、何もできない今こそ、よく考えよとエリフはヨブに言うのです。

23 節でエリフは、こう言います。「**私たちが見出すことのできない全能者は、力にすぐれた方。さばきと正義に富み、苦しめることをなさない**」。神様は、イエス様を信じて、神様の子どもとされた私たちを「苦しめること」はなさりません。神様は、私たちの父として、しばしば私たちを「懲らしめる」時があります。しかしそれは、神様の愛から出ていることであり、私たちに訓練し、成長させるためのものなのです。旧約聖書の哀歌 3：31-33 には、こういう言葉があります。「**主は、いつまでも見放しておられない。主は、たとえ悲しみを与えたとしても、その豊かな恵みによって、人をあわれまれる。主が人の子らを、意味もなく、苦しめ悩ませることはない**」。神様は、御自身の子どもである私たちを、「意味もなく、苦しめ悩ませることはない」のです。私たちの苦しみには、必ず意味があり、そこには神様の愛があるのです。

ヨブの三人の友人たちは、神様がヨブに与えた苦しみの目的は、神様の「裁き」であると考えました。しかしエリフは、そうではなく、神様がヨブに与えた苦しみの目的は、「懲らしめ」であり「訓練」であるとし、ヨブに何かを教えようとする神様の愛から出ているものだと考えたのです。

おわりに

最後に、21-22 節を見てみましょう。「**今、光を見ることができない。それは雨雲の中に輝いている。しかし、風が吹いて雲を払いのけると、北から黄金の輝きが現れ、神の周りには恐るべき威厳がある**」。苦しみの只中にある時、私たちは希望の光を見出すことはできません。また神様御自身を見失うこともあるかもしれません。しかし、太陽が雲の中でいつも光り輝いているように、たとえ今は見えなくても、確かに希望の光はあり、神様御自身は存在しておられるのです。そしてやがて、雲が取り除かれて、希望の光が見えてくる時、神様御自身が見えてくる時が必ず来るのです。

私たちは、何もできない時こそ、立ち止まってよく考えなければなりません。そして神様の御声をよく聞かなければなりません。そこには必ず希望の光があるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちには、しばしば突然の試練がやってきます。その意味が分からず、私たちはうろたえます。しかしイエスを信じ、あなたの子どもとされた私たちに対して、あなたは意味もない苦しみを決して与えません。必ず私たちにとって益となり、私たちの成長に繋がる意味があるはずです。そのことを無力な時こそ、よく考えさせてください。あなたの愛の光のもとで、あなたの御声に耳を傾けさせてください。

今は光を見ることができなくても、確かに雲の中に光は輝いていること、やがて雲が取り除かれることを信じさせてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。